

## 巻 頭 言

2011年3月11日に起きた東北地方太平洋沖地震から5年が経過した。この地震とはどのようなものだったのか。さまざまな分野でその科学的な検討が進められている。東北地方太平洋沿岸においてマグニチュード9クラスの巨大地震は過去3500年の間に少なくとも7回起きておりと推定されており、869年の平安時代に起きた貞観地震はそのひとつにあたる。当時、国府のあった多賀城（今の宮城県多賀城市）の政庁のすぐ手前まで津波が押し寄せたことや、人馬・家屋などの被害状況の記録が古文書に残っている。しかし、それ以外のことについては情報がほとんどない。

今回の地震は、そのメカニズムや影響について科学的に検討できる最初の地震であると言える。さまざまな分野の研究者が、その専門性の視点から調査研究を行っており、これまで知られていなかったことが解明されている。地震およびそれに続く液状化、複数回の巨大津波、現在まで継続する地盤沈下によって東北地方から関東地方にかけての沿岸環境は大きく変化した。その過程で、生息していた生物も大きなダメージを受けたと考えられる。

この地震で私たちの専門とする貝はどうなったのか。水産重要種のマガキやホタテガイ、エゾアワビ、アサリ、ヤマトシジミ等については地震・津波による被害の状況の把握、生産回復のために研究や事業が公的資金を使って進められている。また、沿岸の岩礁域や河口の砂質域などでは生物多様性の観点から貝類を含む様々なベントスについて、地震後の個体数変動や群集組成の変化が検討されている。しかし、研究は一部の種に限られており、それ以外の種、とくに海浜域から陸域、淡水域に生息する種についての調査は、これまでほとんど行われていなかった。

そこで、日本貝類学会では、これらの場所に生息している貝類が地震後どうなったのかについて検討することを目的に、学会の事業としてプロジェクトを企画し、名古屋貝類談話会の主要なメンバーでもある4人の専門家が現地調査を実施した。東北地方では海産貝類と比較して陸産や淡水産の貝類の研究が遅れており、地震前の生息状況の情報が乏しかった。そこで、プロジェクトチームは過去に調査が行われた場所を中心に調査を行い、地震前後での貝類相や生息環境の変化等を種ごとに詳細に検討した。短期間の調査にも関わらずそれぞれの専門家が得意とする領域やそれらを集めた総合力で、地震後の陸域、淡水域の貝類の生息状況の概要を初めて明らかにすることができた。

そこで、本研究の成果を「ちりぼたん」の特集号として出版し社会に公表することとした。調査にあたった会員の早瀬善正氏、評議員の木村昭一氏、評議員の河辺訓受氏、評議員の湊 宏氏および種々のご協力をいただいた会員諸氏に心より感謝申し上げる。被災地では土地のかさ上げや海岸防波堤の建設が進み、今後様々な施設の建設・整備が予定されるなど、今後も沿岸域の環境は大きく変わることが予想される。また、福島県の陸域・淡水域の貝類相については、地震後ほとんど調査が進んでいない。地盤沈下は数十年から百年以上続くと言われている。今後も会員諸氏の英知を集め「動く学会、行動する学会」としてさらに活動を継続していきたい。

日本貝類学会会長 大越 健嗣